



校長室だより 36号

中島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【今週の行事】 12月22日(水) 2学期終業式

- 1 「私と珠算」 7回卒 井手英子 30周年記念誌より抜粋
2 出逢ったいい話 『縁を生かす』 『致知』2005年12月号より抜粋

「私と珠算」(原文) 7回卒 井手英子(旧姓伊地知)

最近、「あの茶色の格子の制服はどこネ。誰にでもあいさつをするよ。」という言葉
を耳にする。それは我らの後輩、日南振徳商生なのである。

創立当初からの「礼儀の正しさ」が現在も受け継がれている母校に誇りを感じます。

私が振徳高校を卒業して、20年という歳月が流れ、今年は日南振徳30周年という
記念すべき年である。

先日、子供が校歌をくちずさんでいるのを聞いて、ふと、思い出したのは高校の校
歌「潮の音遠き 朝ぼらけ」でした。これから、高校時代にタイムスリップしてみよ
う。

入学してから、何の迷いもなく、珠算部に入部しました。小学生の頃から、そろば
んを習っていたので、その腕を更に研ぎたいと思ったからです。

当時は、現校長の上田勝行先生を顧問に延岡商業に「追いつき、追いこせ」を合言
葉に練習しました。富家教頭先生の「お前たちは万年2位でいいのか。」と言われた言
葉は今でも忘れることが出来ません。その言葉を胸に毎日練習して、延岡商業に勝て
た時には、ものすごくうれしかったです。

しかし、あまりの練習のきつさに退部する人や休みのことで部員とのケンカなどあ
りました。

でも、これくらいでくじけるような振徳珠算部ではなかったのです。それをバネに九
州大会の団体競技で3位入賞という成績をあげました。これは個人競技では、味わえ
ない喜びです。この光景は今でも昨日のこのように鮮明に思い出されます。

3年間の珠算部での思い出は、自分の腕を研ぐだけでなく、先輩、後輩たちとの人
間関係も勉強させられました。

この珠算をしていたおかげで、色々な所に大会等で行くことが出来ました。一番の
思い出は富家教頭と行った福島県。宮崎からの寝台車が遅れて、東京からは超満員の
電車の通路に新聞を敷いて座ったことがありました。団体で行った東京では、毎日、
朝から夕方まで他校の練習試合等でクタクタになったことも、今では、なつかしい青
春の1ページです。

現在、私は子供たちに「そろばん」を教えています。自分が習うよりも、教える方
の難しさが最近わかってきました。技術よりも礼儀を基本に教えていこうと思います。
私と珠算は思い出ばかりでなく、これからも永遠に続くことでしょう。

日南振徳商業創立30周年、おめでとうございます。

出逢ったいい話 『縁を生かす』

文学博士「鈴木秀子氏」の実話より

その先生が5年生の担任になった時、一人、服装が汚くだらしく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の1年生からの記録が目にとまった。「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ」とある。間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。2年生になると、「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。3年生では「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りする」後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」とあり、4年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子どもに暴力をふるう」先生の胸に激しい痛みが走った。ダメと決めつけていた子が突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として自分の前に立ち現れてきたのだ。

先生にとって目を開かれた瞬間であった。放課後、先生は少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？分からないところは教えてあげるから」少年は初めて笑顔を見せた。それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手をあげた時、先生に大きな喜びがわき起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで開けてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくやうに飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ、お母さんの匂い！ きょうはすてきなクリスマスだ」6年生では先生は少年の担任ではなくなった。

卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。「先生は僕のお母さんのようです。そして、いままで出会った中で一番すばらしい先生でした」

それから6年。またカードが届いた。「明日は高校の卒業式です。僕は5年生で先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することができます」

10年を経て、またカードがきた。そこには先生と出会えたことへの感謝と父親に叩かれた体験があるから患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締めくくられていた。「僕はよく5年生の時の先生を思い出します。あのままだめになってしまう僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、5年生の時に担任してくださった先生です」

そして1年。届いたカードは結婚式の招待状だった。「母の席に座ってください」と一行、書き添えられていた。

たった1年間の担任の先生との縁。その縁に少年は無数の光を見出し、それを拠り所として、それからの人生を生きた。ここにこの少年の素晴らしさがある。

人は誰でも無数の縁の中に生きている。無数の縁に育まれ、人はその人生を開花させていく。大事なものは、与えられた縁をどう生かすかである。